『レストラン紹介』　第51 回

Bistro FITZ CARRALD（ビストロ・フィッツ カラルド）

Bistro FITZ CARRALDは、セントロ地区 アマゾナス劇場裏手の文化施設パラシオ・ダ・ジュスティサ文化センター（歴史的な黄色い建物）にほど近いHotel Villa Amazônia（ホテル・ヴィラ・アマゾニア／四つ星ホテル）の中にあるレストランです。FITZ CARRALDという名前は、ヴェルナー・ヘルツォーク監督によるクラウス・キンスキー主演のドイツ映画Fitzcarraldo（1982年）に由来しています。

ホテルの中庭には、雰囲気のいいインスタ映えするプールがありレストランからも眺められます。このホテルの一部は、天然ゴムで一時代を築いたマナウスの黄金時代を彷彿させる歴史的な邸宅を修復しており、分厚い壁とアマゾンの銘木を使った旧い建物は一世紀の歴史を感じさせ、家族や友人、カップルで来ても、時代を超えた素敵な時間を過ごせます。

私たちが座った席は、10人程が座れる大きなテーブルで、ゴム景気時代から使われていたものをそのままに使用しています。天井もとても高く静かな空間で、周りには別のグループ客もいなかったので、ゆっくりと気兼ねなく食事ができました。

料理はブラジル料理を当地の材料でアレンジしたメニューです。
メニューにも映画の船が描かれています。

飲み物は当地のクラフトビールで乾杯、前菜にはPastel crocante de queijo coalho, tucumã e castanhas frescas（ツクマンとブラジルナッツ入りチーズのミニパステル）、Steak Tartar com mix de folhas e chips de macaxeira（タルタルステーキのマカシェイラチップ添え）、Ceviche de pirarucu com chips de banana pacovã（ピラルクのシェビッチとバナナチップ添え）を頼みました。ワインも豊富にストックしています。

メインディッシュは、先ず店の料理の味が分かる Fettuccine à carbonara - com molho cremoso de gema, parmesão e bacon（カルボナーラのパスタ）、続いて Galeto confitado com aroma amazônico, com polenta cremosa de queijos（チキンのチーズクリーム煮）、Lombo de tambaqui com vinagrete de Uarini & nhoque de banana da terra（タンバキのバナナニョッキ添え）、Minon ao molho de tucupí preto & fettuccine ao espumante e sálvia com castanha do brasil（牛フィレステーキ・ツクピーソース掛けと、ブラジルナッツとサルビア風味シャンパンソースのパスタ）を頼みました。

最後にはデザートを食べ、おなかいっぱいになりました。料理の味は、可もなく不可もなくといったところです。

今回の会計は、**7人で合計1,638レアル、一人当たり234レアル**でした。他店よりも少し高いかなぁと感じましたが、総合的にはレストランの味だけで評価するよりも、お店の雰囲気を楽しみながら一緒に来た人とお酒を飲み、19世紀の終わりに栄光を誇った遠い時代のマナウスの街に思いを馳せ、当時の雰囲気を味わいながら会話を楽しむのもいいのではないでしょうか。そういうことであれば、また来てもいいかなと思わせるレストランです。

Bistro Fitz Carraldo

所在： Rua 10 de julho, 315, Centro, Manaus,
TEL： (92) 3347-7829
※駐車場はないので、路駐となります

※　本取材は 2024 年 4 月 12 日に実施されたものです。

【参考】

マナウス － 繁栄と衰退

19 世紀末にアマゾン上流で天然ゴムが発見され、一攫千金を夢見た人々が欧州から押し寄せてきた。空前のゴム景気で大金を手にした成功者たちは、欧州文化をアマゾン奥地のマナウスに持ち込み、パリのオペラ座を模して TEATRO AMAZONAS（アマゾナス劇場）が造られた。全て当時最高の材料を欧州より輸入、木材に至ってはアマゾンの銘木を切り出して欧州に運んで製材したものを再度輸入し、それら最高の材料で欧州の職人たちの手によって 1898 年に完成した。欧州から一流の歌手を招いてオペラが上演され、ダンスホールには夜ごとに着飾った社交界の名士が集まったという。汚れた衣装はクリーニングのために欧州に送り付け、飼馬にはシャンパンを飲ますほど狂気じみた時代だった。マナウスの街にはブラジル初の電灯が灯り、電車が走り、英国技術によるレンガ造りの下水排水溝も敷設され、当時のブラジルでも珍しい欧州風情で溢れていた。また 1909 年にはブラジル初の連邦総合大学（現在の UFAM – Universidade Federal do Amazonas）が開講した。

しかし、ゴム景気に沸くマナウスの狂気と繁栄の裏では、人口 5 万人の当時のマナウスで、天然ゴム採集の現地労働力が不足し、東北ブラジルからの出稼ぎ労働者や、国内各地から送り込まれた囚人達が、マラリアなど熱帯病が蔓延するジャングルの中での劣悪な労働環境で天然ゴム採集に従事していた。ゴム採集の元締めは地元実業家であったが、金融と流通を支配していたのは英国人であった。

そうした中で、第 1 次大戦後 1876 年に英国人探検家ヘンリー・ウィッカム（1912 年ゴム移植の功績により英国女王より『サー』の称号を授かった）は、ゴムの種子の禁輸政策をとっていたブ

ラジルから七万粒の種子の持ち出しに成功、英国リバプール港に送り届けた。 英国王立植物園（キューガーデン）に運ばれた7万粒の内、2,625本の発芽に成功し、その苗はセイロン（現在のスリランカ）とシンガポールへ送られ、後に植民地だったマレーシアに移植し東南アジアへ広がり、大農園での栽培（プランテーション）に成功した。

栽培技術の進歩・発展とともに、野性のゴムから栽培ゴムへと移行し生産と需要が急速に拡大、ジャングルでの自然採集に依存していたアマゾンの天然ゴムは、1910年頃から価格が暴落し、国際競争力を失い輸出は停止、ジャングルの孤島マナウスは急速に衰退していくことになる。

（アマゾナス日系商工会議所HPより抜粋編集）

映画 Fitzcarrald（フィッツカラルド）－ 第35回カンヌ国際映画祭監督賞受賞作品

19世紀末、マナウスのオペラ座（TEATRO AMAZONAS）で行われた世界的オペラ歌手の公演を聞くために、1人の男がペルー イキトスからマナウスにたどり着いた。男の名はアイルランド出身のブライアン・スウィーニー・フィッツジェラルド。現地では、通称「フィッツカラルド」と呼ばれていた。彼は、アンデスに鉄道を敷設するため南米に移住してきたが、計画は頓挫し破産に追い込まれたことから、ペルーのアマゾン川流域の街、イキトスの質素な水上ハウスで氷を作って生活の糧にしていた。現地の白人社会では変人扱いであったフィッツカラルドだが、彼の愛人である娼婦宿の女主人モリー・アイダだけは、唯一人の彼の理解者だった。

フィッツカラルドはカルーソーのオペラにいたく感動し、ヨーロッパでもっとも有名なオペラ座を模したオペラハウスをペルー イキトスのジャングルに建てるという夢を追うことになる。しかし、この夢を実現するためには莫大な資金が必要となるため、前人未踏のジャングルを切り拓いてゴム園を作り、資金を稼ぐことを思いつく。

フィッツカラルドは、モリーに土地の購入と川をのぼるための中古の蒸気船を買う資金を出してもらい、その船に「モリー・アイダ」と名付け、川の上流に向けて出航する。しかし、その土地は川の上流にあり、急流で途中に激しい瀬があるため、船で直接行くことはできない辺境にあった。

それでも、フィッツカラルドは隣接する航行可能な川を遡り、未開の地に住むインディオたちに協力を仰ぎ、蒸気船を陸に揚げて山を越え目的の川に浮かべるという狂気の策に挑んだ。過酷な作業の末、ついには船を目的の川に浮かべることに成功したのだが・・・。

本作はＣＧなどない時代に撮影され、クライマックスの場面では壮大なセットで長期に及んで撮影された大作であるが、ロケは過酷を極め、キャスティングで様々なトラブルに見舞われた。当初、予定していた主役（ジャック・ニコルソン、その後ジェイソン・ロバーズ）をはじめ豪華キャスト（ミック・ジャガーやマリオ・アドルフ他）で撮影に臨んだが、アマゾンの奥地で行われた撮影では、病気や過酷な撮影についていけずに次々に降板し、改めて怪優クラウス・キンスキーを主演として撮り直した。ロケ中、クラウス・キンスキーの奇行やスタッフに降りかかった数々の事故もあり完成に3年を費やした、という曰くつきの映画でもある。

※　本作品DVDは商工会議所事務局にあります。ご希望の方には貸出致します。

（但し、音声オランダ語、字幕ポルトガル語となります）